

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02638

研究課題名（和文）唐宋変革期における諸子学の隆盛及び中唐古文家との関係

研究課題名（英文）The Relationship between the Prominence of Studies of the Early Chinese Philosophers and the Old-style Prose Writers of the Mid-Tang in the Tang-Song Transition.

研究代表者

鈴木 達明（Suzuki, Tatsuaki）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90456814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、韓愈・柳宗元ら中唐の古文家たちが、当時における先秦諸子に関する学術とどのような関係性を持っていたかについて、その文学・思想における影響を検証することで明らかにし、あわせて唐宋変革期におけるその意義を考察したものである。その結果、韓愈における「莊屈」の併称の誕生や、中唐古文家における新しい天人観の展開など、唐宋変革に関わる文学・思想上の転換において諸子の学術の受容がいかに影響したかを提示することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

韓愈を中心とした中唐期の古文家たちにおいて、当時の諸子学の隆盛が与えた影響を具体的に示すことができたことは、中国学における巨大な包括的研究テーマである唐宋変革論の中で、特にその萌芽期における、文学・思想両面に及ぶ変化の発生原因やそのメカニズムを明らかにすることに重要な貢献を果たすものと考えている。また、諸子百家や韓愈・柳宗元らの散文は、現代の漢文教育において主要な素材となっているが、本研究の成果は、その中での繋がりや新しい読解を示すものであり、教育を通して社会的にも意義を有するものと言えよう。

研究成果の概要（英文）：In this study, I aim to clarify the relationship between old-style prose writers (guwen jia 古文家) of the mid-Tang, represented by Han Yu 韓愈 and Liu Zongyuan 柳宗元, and studies of pre-Qin philosophers at the time by examining their influence on literature and thought. On the basis of this research, I consider their significance during the Tang-Song transition 唐宋変革. As a result, it becomes clear that the acceptance of studies of early Chinese philosophers had an impact on literary and ideological achievements related to the Tang-Song transition, such as the coining of the term “Zhuang-Sao” 莊騷 by Han Yu and the development of a new view of Heaven and people among old-style prose writers of the mid-Tang.

研究分野：中国文学

キーワード：闘争変革 韓愈 諸子百家 古文運動 中唐 莊子 屈原 淮南子

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

いわゆる唐宋変革論は、政治・経済・社会・文化の各方面にわたる総合的な時代の変化をとらえる学術モデルとして、現在まで中国学全域に巨大な影響を与え続けてきた。8世紀後半から9世紀前半にかけての唐代中期(以下、文学史的な区分による呼称を借り、「中唐期」と呼ぶ。)はその萌芽期に当たり、諸分野を貫く大きな変動が始まった時代である。その担い手となったのが、韓愈・柳宗元をその代表とするいわゆる「中唐古文家」たちであった。この呼び名は、彼らが立ち上げた新しい文学の潮流としての古文運動によるものだが、思想的にも、韓愈は近世儒学の先駆として、柳宗元は近代にも繋がる合理主義の中興の祖として、重要な位置づけを与えられ、唐宋変革論の中でも重視される人物であると言える。

一般に唐代の思想については、儒教・仏教・道教のいわゆる三教の隆盛と、仏教への対抗意識を持ちつつその影響により変化する儒教を中心として記述される。一方でその他の諸子の学術については、朝廷の支持を得て経書に準じる扱いを受けていた一部の道家を除き、ほとんど注目されてこなかった。

しかしながら類書や敦煌資料からは、当時において諸子のテキストが広く流通していたことが明らかである。また六朝期に停滞した後、唐代においてにわかに研究が進み、注釈が施された諸子文献も多く、中には『荀子』のように古文家と直接関係のある人物によって注釈がつけられた例もある。更に加えて、韓愈の「読荀」「読鶡冠子」「読墨子」や柳宗元の一連の「弁某子」など、中唐期の古文家の著作の中には、諸子に関する論文が含まれ、その中には後漢以降初めて諸子を正面から論じたものも少なくない。

以上の状況を踏まえて、唐代、特に中唐期における諸子学の隆盛とその影響という新しい視点を導入して、中唐古文家たちの活動を考えることにより、唐宋変革の萌芽期の研究に新しい知見をもたらすことが期待されると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、中唐時期における古文家と諸子学の関係性を明らかにすることで、唐宋変革論と中唐文学・思想研究に新たな視座を生み出すことを大きな目的とする。

ここで明らかにしようとする「関係性」を具体的に述べるならば、諸子学の隆盛に古文家たちがどう関わり、思想・文学の両面において、どのような影響を受けたのかということである。言い換えれば、唐宋変革の萌芽期に於いて、諸子学が果たした役割を明らかにするということである。

3. 研究の方法

以上の目的に到る方法として、以下の三つを軸として検討を進めた。いずれにおいても基礎資料となるテキスト読解に関しては、連携研究者の協力を仰いだ。

(1) 唐代中期における諸子学の状況を把握する。

唐代までの諸子学の展開、唐代の諸子注釈、類書や敦煌資料なども含めた諸子学の広がりについて、先行研究を整理した上で考察し、唐代における諸子の受容を総合的に把握することにつとめた。併せて、時代の転換期において、その時代性がどのようなかたちで思想・学術に反映されるのか、それに関する参考可能なモデルとして、前漢における所謂「儒教の官学化」論についての従来議論を検討した。

(2) 中唐古文家の思想・学術観における諸子学の影響を検討する。

韓愈・柳宗元を中心に、中唐古文家のテキストを読み進めた。従来研究では対象が散文に偏る傾向があったため、詩についても十分に検討を加えることを特に意識した。その上で、諸子に言及された論文や詩を抽出し、(1)の研究で得た知見と合わせて、主に思想面について、学術的背景としての諸子学とその影響について考察した。思想的な主題としては、言語観・人性論などいくつかの候補を立てて検討し、そのうち特に天人観をとりあげて影響を論じることとした。

(3) 中唐古文家の文学作品に見られる諸子の影響を検討する。

中唐古文家の中でも、韓愈と所謂「韓門弟子」と称される周辺の文人たち、そして柳宗元・劉禹錫の詩文を対象として、特にその詩文の文学表現に注目して、発想と論理展開・語彙・比喻表現などからうかがえる諸子の影響を考察した。更にその結果について、古文運動以前の唐代文人との比較を通して、中唐古文家における変化とその性質を明らかにしようとした。

4. 研究成果

以下の項目の数字は上記の「研究の方法」と対応する。

(1) 本研究の基礎となる、中唐古文家のテキストの精読と諸子学の学術史研究とに関する成果としては、『韓愈詩訳注』第二冊の刊行と論文「新しい聖人の書を目指して 『淮南子』の危機意識」がある。

前者は、2015年に第一冊が刊行され、第五冊完結予定の継続的学術研究事業の一部である。韓愈は李白・杜甫・白居易と併称される詩人であり、本訳注は、はじめてその全ての詩に日本語訳と学術的にも高い水準の注釈を付けたものとして、文学研究にとどまらない影響力を持つも

のと言える。報告者は、連携研究者とともにこの訳注作成に関わっており、毎月一度の編者・著者全員による検討会に参加してきた。それを通して本研究課題に関する重要な知見を得るとともに、訳注作成者（連携研究者は全体の編者も兼ねる）として課題から得られた知見をフィードバックしてきた。

後者は唐代における諸子学を中心とする道家思想の学術史研究を進める中で得られた成果である。『淮南子』では、先秦道家と同じく「道」は語り得ないとする言語観が基調となっているが、それは徹底されたものではない。むしろそれと反する特徴として、序文にあたる要略篇では書物作成への関心と自らの書への強い自負が見られる。更に脩務訓では、「新たな聖人の書」として自らを価値づけ、実質的な機能において儒家經典と遜色のない書物を作りながらも、世間の評価が伴わないことへの不満と受容者への期待を表明している。

『淮南子』は、学術の転換期である前漢武帝期に成立した。従来、所謂「儒教の国教化」論争の中で、この転換期の性質について論じられてきたが、本研究では、これまでにない新しい知見として、当時の学術の転換を、先秦道家のように浮動的な道家的聖人の発言に依拠した学術から、儒家のように固定的な經典を持った学術への転換として捉え直すことができることを指摘した。本研究課題全体の中での意義としては、対象とする時代は異なるが、文学研究の視点を通して、思想・学術の大きな転換期の時代性が諸子資料の中にどう反映されるのか、またその相互作用をどう観察するかについて、一つの研究モデルを得られたと言える。

(2) 諸子学の思想的影響の検討では、先に述べたように特に天人観 天と人の関係性に関する考え方 に注目した。その成果が、口頭発表「韓愈の天人観と先秦諸子の受容について」である。天人観は中国思想史研究における重要なテーマの一つであり、中唐期についても、これまで柳宗元・劉禹錫の合理主義的な天人観が注目され、先行する春秋学者との影響関係などについて主に論じられてきた。一方で、韓愈については、守旧的な天人相関説を持つだけと見られ、宋儒に繋がる道統論や載道の文学観と比べ、十分には論じられてこなかった。

上記の発表では、韓愈の詩・文に見える天人観を整理・分析することで、その独自性を指摘した。韓愈は、人と異なる価値観を持つ存在であり、時には暴力性を発揮して人と対立するものとして「天」を捉えた。にもかかわらず、韓愈はあくまで伝統的な天人相関の枠組みに従って天を重視する姿勢を崩さない。このような韓愈の天人観は、柳宗元や劉禹錫とは別の意味で大きな特徴を持つと言える。更には、平衡状態を失った環境においてこそ優れた文学が生まれるという、所謂「不平の文学」観についても、この天人観から説明ができる可能性を示した。「不平の文学」観は、「載道の文学」観とともに、韓愈に由来する文学観として、後世に大きな影響を及ぼすものであり、その思想的背景について新しい要素を提出できたことは、大きな意義を持つと考えられる。諸子学との関係で言えば、『莊子』の天人観と概念的構造・特殊な術語の点において類似性が見られる部分があり、今後更に検討を加えることで諸子学の影響についてより具体的に示せると考えている。

(3) 中唐古文家の文学作品に見られる諸子の影響については、論文「『莊騷の誕生』 韓愈における文学としての『莊子』の受容」がその成果である。

「莊騷」は『莊子』と屈原の辞賦との併称である。この併称は韓愈に始まるとされ、その後、文学批評などに広く用いられる概念となる。莊子と屈原（『莊子』と『楚辞』）の類似性は自明なものではなく、この併称の誕生には、中唐期における諸子の文学性への注目の始まりを背景として、韓愈の両者（特に莊子）に対する独自の把握の仕方が深く関わっていた。

中唐以前から『莊子』の思想や寓話は多くの文学作品に影響を与えてきたものであったが、その文章表現自体を文学的な視点で評価するものは限られており、人物としてもあくまで隠遁者や思想家として受容されるのみであった。ところが韓愈は、莊子を文学者としてとらえ、文学的な角度からその書の評価した。屈原についても、柳宗元や劉禹錫らが「放逐された忠臣」として自らの境遇を重ねて受容したのに対し、韓愈はそのような屈原像とはやや距離を置いて、その文学を評価した。このように思想性や精神性、倫理性と切り離した文学的な視点から『莊子』と屈原の辞賦とを評価することで、韓愈において両者の併称が生み出されたと考えられる。

当時、柳宗元や韓愈の弟子筋に当たる文人達にも、韓愈ほどではないにしろ、『莊子』の文学性に注目していたことがわかる表現があり、古文運動における「古文」の創出の試みが、背景としてあったことがうかがわれる。しかしながら、柳宗元の『莊子』評価は韓愈ほど高くなく、その差違は、「奇」すなわち規範からの逸脱についての両者の対照的な態度に由来するものと考えられた。

「莊騷」概念の発生の意味、諸子への評価による韓愈と柳宗元の文学観の差違を明らかにできたことは、思想・文学の両面において、広く利用可能な成果であると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鈴木達明	4. 巻 78巻1号
2. 論文標題 「莊騷」の誕生 韓愈における文学としての『莊子』の受容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋史研究	6. 最初と最後の頁 33-70（予定）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木達明	4. 巻 89
2. 論文標題 新しい聖人の書を目指して 學術の転換期における『淮南子』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中国文学報	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木達明
2. 発表標題 韓愈の天人観と先秦諸子の受容について
3. 学会等名 京都大学中国文学会第34回例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川合康三, 緑川英樹, 好川聡	4. 発行年 2017年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 565(8-15, 148-151, 220-231, 565)
3. 書名 韓愈詩訳注 第二冊	

〔産業財産権〕

[その他]

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携 研究者	好川 聡 (Yoshikawa Satoshi) (10456816)	岐阜大学・教育学部・准教授 (13701)	